

〔3〕 発音指導上のポイント

発音指導のための練習材料と指導のための一般的留意事項については「生活日本語」の各課の練習部分と巻末の付録にかなりの量の情報が提供されており、それを十分に活用することで、おおよその目的は達成させられるものと思われる。

ここでは、そこで提示されていた問題点も含め、間違いを起こす原因や、指導矯正の手掛かりになる知識や技術を問題点ごとにまとめ整理した形で示しておく。発音指導のための手掛かりとして利用されれば幸いである。

(1) 母音を中心として

① 〔エ〕をめぐって

中国語では日本語の〔エ〕にぴったりと置き換えられる音はない。〔センセー〕と発音させようとしても、〔セ〕が〔サ〕や〔ス〕に近い音で発音される。

矯正指導の出発点として〔エ〕の音を含む音節、〔エ、ケ、セ、テ、ネ、ヘ、メ、レ、ゲ、デ、ペ、ベ〕について正確に、いつも安定した発音ができるようにしておく必要がある。

安定した発音ができるようにするためには、〔アエイ〕〔カケキ〕〔サセシ〕……のように、〔ア〕を含む音、〔イ〕を含む音と対比、関連付けをしながら練習するとよい。〔エイ〕のように音が発音の途中で変化したりしないよう注意したい。

② 〔ウ〕と〔オ〕をめぐって

中国語では、日本語の〔ウ〕に相当する音を発音するときには、日本語よりも舌の高まる位置がかなり後寄りになる。唇の形も、日本語に比べて円唇になる。日本人の耳には〔オ〕と聞こえてしまうような音である。それに比べて、中国人が〔オ〕と発音するときには、唇の形が平らであり舌の高まる位置も前寄りである。

したがって〔ウ〕と〔オ〕が混乱を起こし、〔ヨンデ〕が〔ユンデ〕のように聞こえたり、〔フン〕が〔ホン〕のように聞こえたりする。

〔ウ〕については、まず強い唇の丸めの習慣を取り去ること、〔オ〕については逆に唇を丸くとがらせて発音する習慣をつけさせることから始めたい。

練習材料は、〔ア〕と〔オ〕と〔ウ〕の音を含んだものを使い、〔オ〕と〔ウ〕の音の違いを意識しやすいように指導するとよい。

(2) 清音・濁音を中心として

〔パ〕と〔バ〕、あるいは、〔タ〕と〔ダ〕が正確に発音し分けられなかったり聞き分けられなかったりする問題点は、最も矯正に時間を取られる事柄である。

この問題について、よく、清音と濁音の区別ができないと言うことがあるが、これは事実を正確にとらえた言い方ではない。〔タ〕と〔ダ〕、〔カ〕と〔ガ〕などについては当たっているが、〔パ〕と〔バ〕は半濁音と濁音である。〔バ〕の清音は〔ハ〕であって、発音の上からは、〔バ〕と〔ハ〕は関係がない。清音、濁音という用語は、仮名文字に「゛」が付いているか否かを基準にしたものであることを心得ているべきだ。

日本語の〔パ〕と〔バ〕、〔タ〕と〔ダ〕、〔カ〕と〔ガ〕などの二つの子音の違いは、声帯の振動のない音〔p〕〔t〕〔k〕と、振動のある音〔b〕〔d〕〔g〕の差であって、無声音、有声音と呼ばれるものであることを知っていなければならない。

それに対して中国語の場合は、声帯の振動のあるなしではなく、唇から出てくる息のあるなしを手掛かりにした区別であることが問題を引き起こす原因なのである。

さらに、問題は、日本語の発音では、音の区別は、声帯振動のあるなしですが、具体的な発音では、息があったりなかったりもするので学習者に混乱を引き起こすことになる。〔タカ〕〔カタ〕という二つの言葉を手の甲に息がかかるように発音してみると、〔タ〕の音を発音するときの息の出方が語頭の場合と語中の場合で異なることが分かる。

以上に述べたような事実を踏まえた上で、〔パ〕と〔バ〕、〔タ〕と〔ダ〕、〔カ〕と〔ガ〕をしっかりと対比して発音できるように、根気よく練習を続ける必要がある。もちろん問題は、この三つの組合せだけでなく、〔ピ〕と〔ビ〕、〔プ〕と〔ブ〕、〔ペ〕と〔ベ〕、〔ポ〕と〔ボ〕、〔チ〕と〔ジ〕、〔ツ〕と〔ズ〕……等、パ行、タ行、カ行の音全般に広がっているわけである。『生活日本語』の第5課、第6課、第12課、第13課、第18課の練習を十分に活用されることを望む。

(3) 〔ヒ〕を中心にして

〔ヒ〕の子音が、学習者の母語にないために、日本語の〔ヒ〕の音が〔シ〕に聞こえる音になることがある。時には唇の摩擦を伴う音になることもある。もともと持っていない発音であるだけに矯正の難しいものであるが、発音の仕方の近い音（〔シ〕など摩擦音）の出し方を援用することによって指導していくことができる。ちなみに日本語の〔ヒ〕の子音は、舌の中央部を上あごに近づけて摩擦する音である。〔シ〕の場合が舌

の前の部分を使用するのと比べて後寄りで舌を使うことを会得させることになる。

〔キ〕の音と〔チ〕の音が混同することがある。これは〔キ〕の音を〔チ〕の音で代用し、〔ハガキ〕を〔ハガチ〕、〔キョーカショ〕を〔チョーカショ〕と発音したりするものである。区別を聞き取る練習の後、舌先を上げないようにして〔キ〕の発音練習をするとよい。このとき、長めに〔キー〕と言わせ、母音の〔イ〕の部分も正しい音で発音させたい。

また、〔キ〕の発音ができるようになると、学習者によっては、〔チ〕の音も〔キ〕になることもある。これは、〔キ〕と〔チ〕を一緒にした〔キチキチ〕や〔チキチキ〕、〔キ〕と〔チ〕を含んだ文を言う練習で区別できるようにしたい。

(4) 音の長さを中心として

① 〔ン〕を含む音の連続をめぐる

〔ガンジ〕〔カンケイ〕を発音させると、〔ン〕の部分が短くなることが多い。これは、日本人の場合と違い、〔カ〕と〔ン〕を分けて発音するのではなく〔カン〕でひとまとめであるとする母語での発音習慣に基づくものである。〔ン〕を独立して発音できるよう、また〔ン〕の部分を十分に時間をかけて発音するよう練習をしておくことが望ましい。

〔ン〕を独立させて発音できるようにすることは、〔ン〕の前の母音があいまいになる傾向——例えば、〔カン〕→〔クン〕〔ケン〕を排除することにも役立つ。〔カン…〕を言うとき、語頭の〔カ〕の部分を強く発音しすぎる習慣にも注意を払い、力を均等にして発音するようにさせる指導が必要な場合もある。

② 母音の長短をめぐる

〔おばあさん〕と〔おばさん〕、あるいは〔おおばさん〕その間の区別ができないなど、母音の長さを意識化することも困難点の一つである。一つ一つの母音の発音を正確にしておくのと同様に、学習の最初の段階で徹底的に訓練しておかなければならない。中国語では日本語のように音の長さに対する感覚が必要ではないからである。

ただし、日本語の音の長さが厳密には皆同じだというわけではない。「ン」や小さい「ツ」、長母音の場合など、〔カ〕や〔タ〕などの音よりも短い。〔カン〕では、〔カ〕の方が〔ン〕より長い。

短い音か長い音かを区別する手掛かりとして我々が使っている物差しに、息の止めのあるなしがあることも見逃せない。短い〔カ〕と長い〔カー〕では終わりの部分の

息の止め方に差があることに注目したい。学習者に対して、短い音の練習ではピシッと止め、長い音では止めないなど手掛かりを与えていくのがよいだろう。

(5) 促音を中心として

促音（小さい「ツ」の発音）は、中国東北地方の人たちにとっては、苦手の発音の一つである。

この音の指導に当たっては、教師自身が日本語の促音の発音の仕方を的確に把握していることが大切である。小さい「ツ」の部分は音のない部分だというような言い方をすれば、決して矯正はできない。

〔カッパ〕〔カッブ〕などの唇の音〔p〕の前では〔p〕の音の構えをして一音節分待つということ、〔カッタ〕〔カッテ〕など歯茎の音の前では、〔t〕の発音の構えで、また〔カッカ〕〔カッコ〕では〔k〕の形で一音節分待つと教えなければならない。

〔サ〕〔シ〕〔ス〕〔セ〕〔ソ〕の前でも〔サ〕や〔シ〕の子音を一音節分続けるということになる。そうしないと、〔カッパ〕が〔カアパ〕と聞こえる発音をし続けることになってしまう。

練習の順序としては、「カッパ」のように唇を使う音から始めるとよい。目で見て唇の動きから、やり方が観察しやすいからである。そして、そのあと、〔タ〕や〔カ〕のような口の中で作り出す音にもっていく。